第２節　成績観・学力観

１．成績観

【「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力」（56.2%）と「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」（51.4%）に回答が集中。「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」（前者）と「名門大学志向」（後者）が拮抗している。この２つに「どこかの大学・短大に入れる学力（ともかく合格）志向」が続く（27.8%）。学校内で中位以上の成績をとりたいと考える生徒が大半だったものの（前節）、そこには「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「どこかの大学・短大に入れる学力（ともかく合格）志向」が相当程度含まれており、高校生の成績アスピレーションが単純に高い水準にあるとはいえない。第１回調査と比較してみると、前回第１位の「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」が微減し（54.3%→51.4%）、第２位の「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」が増加することによって（47.6%→56.2%）、名門大学志向がトップの座をふつうの生活（ほどほどの学力）志向に明け渡した。】（図２－８～10）

Q14　あなたは、次のように思うことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

前節でみたように、高校生の大半は少なくとも中位以上の成績をとりたいと考えている。高校生の成績アスピレーションはかなり高い。そこで、この成績アスピレーションのあり方について、別の角度から、現在の学校生活の過ごし方や将来計画にかかわらせて質問を設定した結果をみることにしよう。

６つの選択肢について回答を多い順に並べると次のようになる（**図２－８**）。

①（ふつうの生活志向）将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればよい　56.2%
②（名門大学志向）できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい　51.4%
③（ともかく合格志向）どこかの大学・短期大学に入れる学力があればよい　27.8%
④（学校生活エンジョイ志向）学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない　27.2%
⑤（勉強本意志向）今は勉強することが一番大切なことだ　23.9%
⑥（楽観的予測）そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう　12.5%

現在の生活の中で勉強が一番大切だとする勉強本意志向は４人に１人であり、決して多数派とはいえない。高校生の多くにとって勉強は必ずしも生活上の最重要事項ではない。とはいえ、成績や学力にはこだわっていないというわけではない。学校生活が楽しければ成績にはこだわらないという学校生活エンジョイ志向は、やはり27.2%と少数派である。さらに、そんなに勉強しなくてもなんとか進学できるだろうと、楽観的に予測している者も１割を少し上回る程度である。

それでは、どの程度の成績や学力が必要なのか。回答率が高かった項目は２つあり、数値も拮抗している。その２つは、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力」と「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」である。「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」と「名門大学志向」が拮抗している。この２つに「どこかの大学・短大に入れる学力」（ともかく合格志向）が続く。前節でみたように、たしかに学校内で中位以上の成績をとりたいと考える生徒が大半だったものの（前節）、これを見る限り、そこに

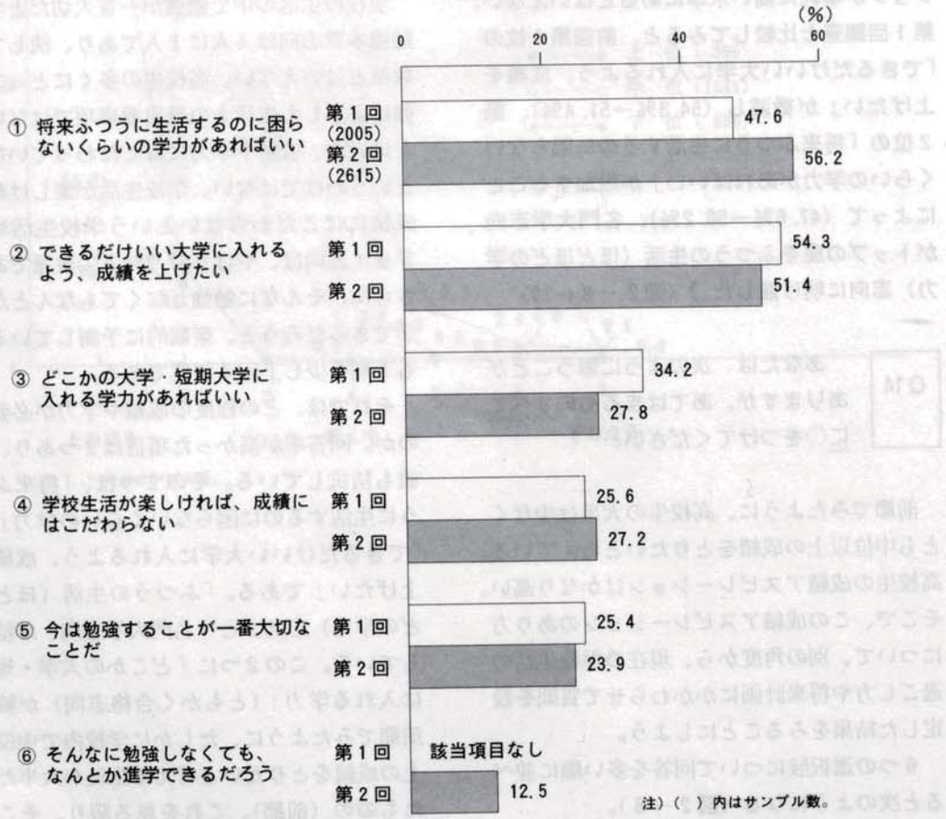
は「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「どこかの大学・短大に入れる学力（ともかく合格）志向」が相当程度含まれており、高校生の成績アスピレーションが単純に高い水準にあるとはいえないことがわかる。

この結果を第１回調査と比較してみると、前回第１位の「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」が微減し（54.3%→51.4%）、第２位の「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」が増加することによって（47.6%→56.2%）、順位が入れ替わった。名門大学志向がトップの座をふつうの生活（ほどほどの学力）志向に明け渡した。両者の数値の差はわずかだが、現代高校生の成績アスピレーションの特性の変化を、象徴的にあらわすことのように思われる。

これらの結果を属性別にみると、もっとも目立つのが高校の進学状況（学校ランク）による意識の差異である（図２－９）。名門大学志向（できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい）は進学率の高い高校ほど強く、超進学校では62.3%に達する。逆に、ふつうの生活（ほどほどの学力）志向、ともかく合格志向、学校生活エンジョイ志向は、いずれも進学率の低い高校ほど強い。学力や成績に対する構えは、それを量的な水準という角度からだけみているとあまり明確ではないが、このように学校ランクによって鋭い分化をみせている。

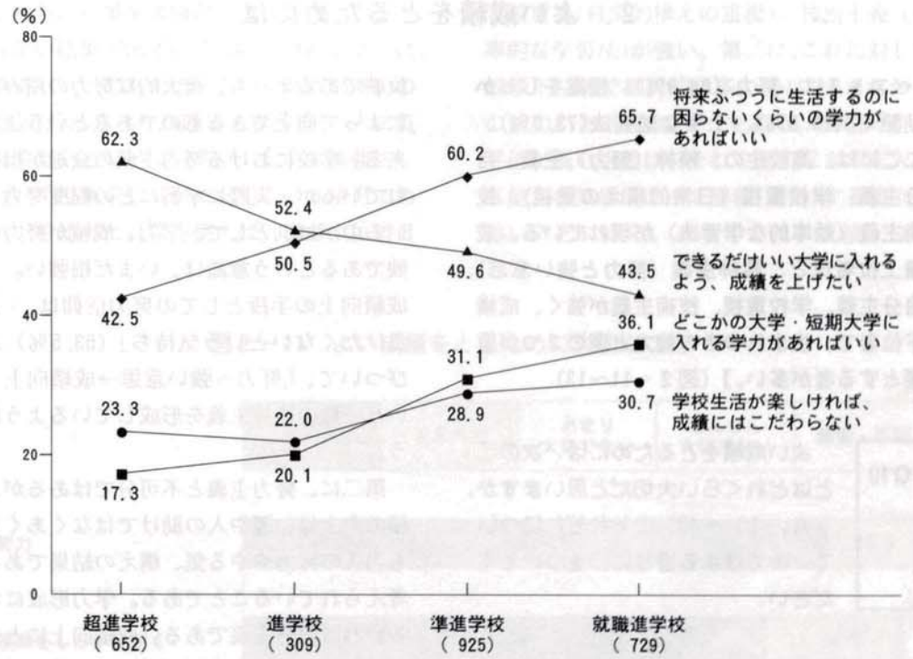
性別にみると（図２－10）、男子に名門大学志向が強く、女子にふつうの生活（ほどほどの学力）志向とともかく合格志向が強い。

図２－８　成績観（第１回との比較）



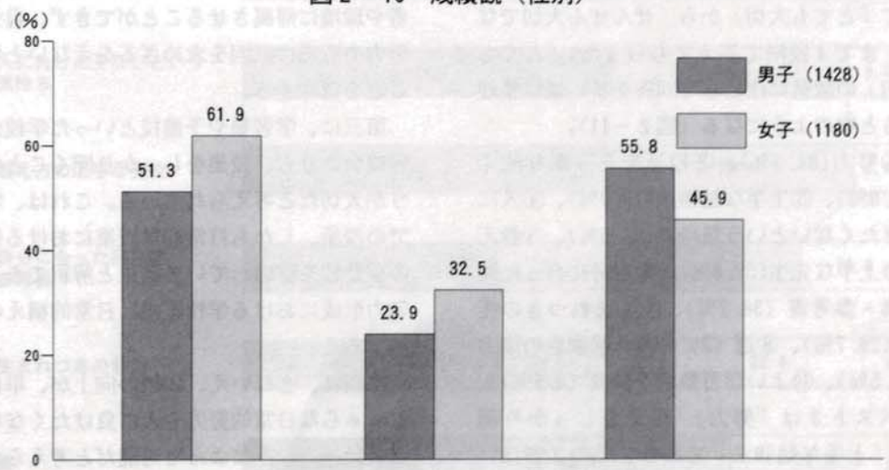
注）（　）内はサンプル数。

図２－９　成績観（高校の進学状況別）



注）（　）内はサンプル数。

図２－10　成績観（性別）



注）（　）内はサンプル数。

3．勉強の効用

【一生懸命勉強することは、第一に会社や役所に入って高い地位につく（出世する）のに、第二に一流の会社に入るのに役立つと考えられている。つまり「職業的な成功、地位の達成」の手段として役立つと考えられている。成績上位者ほど、学びの本質的な効用（尊敬される人になる、社会のために役立つことをする、精神的に豊かな生活をする等）を認識し、下位者ほど学歴の経済的社会的価値のみを信仰する傾向がある。】（図２－14、図２－15）

Q12　一生懸命勉強することは、次のことにどれくらい役立つと思いますか。1）～8）のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

一生懸命勉強することは、将来どのような面で役に立つと考えているのだろうか。ここでは、一生懸命勉強することの効用について、以下のような８つの側面に分けて尋ねた。「とても役立つ」と「まあ役立つ」を合計して、数値の大きな順に整理すると次のようになる（**図２－14**）。

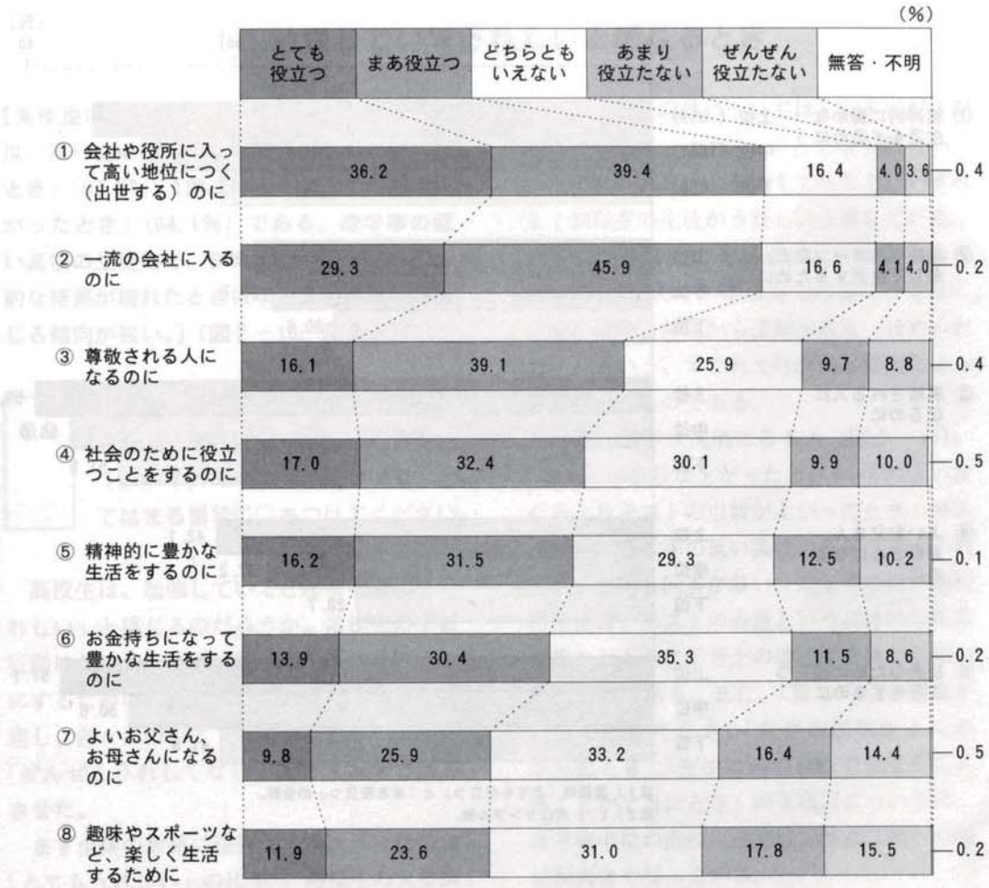
①会社や役所に入って高い地位につく（出世する）のに　75.6%
②一流の会社に入るのに　75.2%
③尊敬される人になるのに　55.2%
④社会のために役立つことをするのに　49.4%
⑤精神的に豊かな生活をするのに　47.7%
⑥お金持ちになって豊かな生活をするのに　44.3%
⑦よいお父さん、お母さんになるのに　35.7%
⑧趣味やスポーツなど、楽しく生活するために　35.5%

回答率から８項目は３つに分類できる。第一に回答率が７割を超え、多数の生徒が役立つと答えた「出世」と「一流の会社」の２項目である。ここから、一生懸命勉強することは、第一に一流の会社に入ったり、その後の出世に役立つ、つまり「職業的な成功、地位の達成」の手段として役立つと考えられていることがわかる。これは見方をかえれば、学歴主義的な社会観を高校生が抱いていることをあらわしている。

第二のグループは、回答率が45%から55%程度の４項目である。尊敬される人になる、社会のために役立つことをする、精神的に豊かな生活をする、お金持ちになって豊かな生活をするの４項目からなる。これらの項目は、その回答率から考えて、いわば一生懸命勉強することの周縁的効用（フリンジ・ベネフィット）ととらえられている。お金持ちになるのに役立つとする回答は半数にみたず、一流の会社に入ったり出世するのに役立つとする回答と矛盾するようにみえる。これは高校生が、学歴の獲得を通じた組織の中での職業的地位達成が必ずしも経済的豊かさをもたらさないことを見抜いていることのあらわれかもしれない。

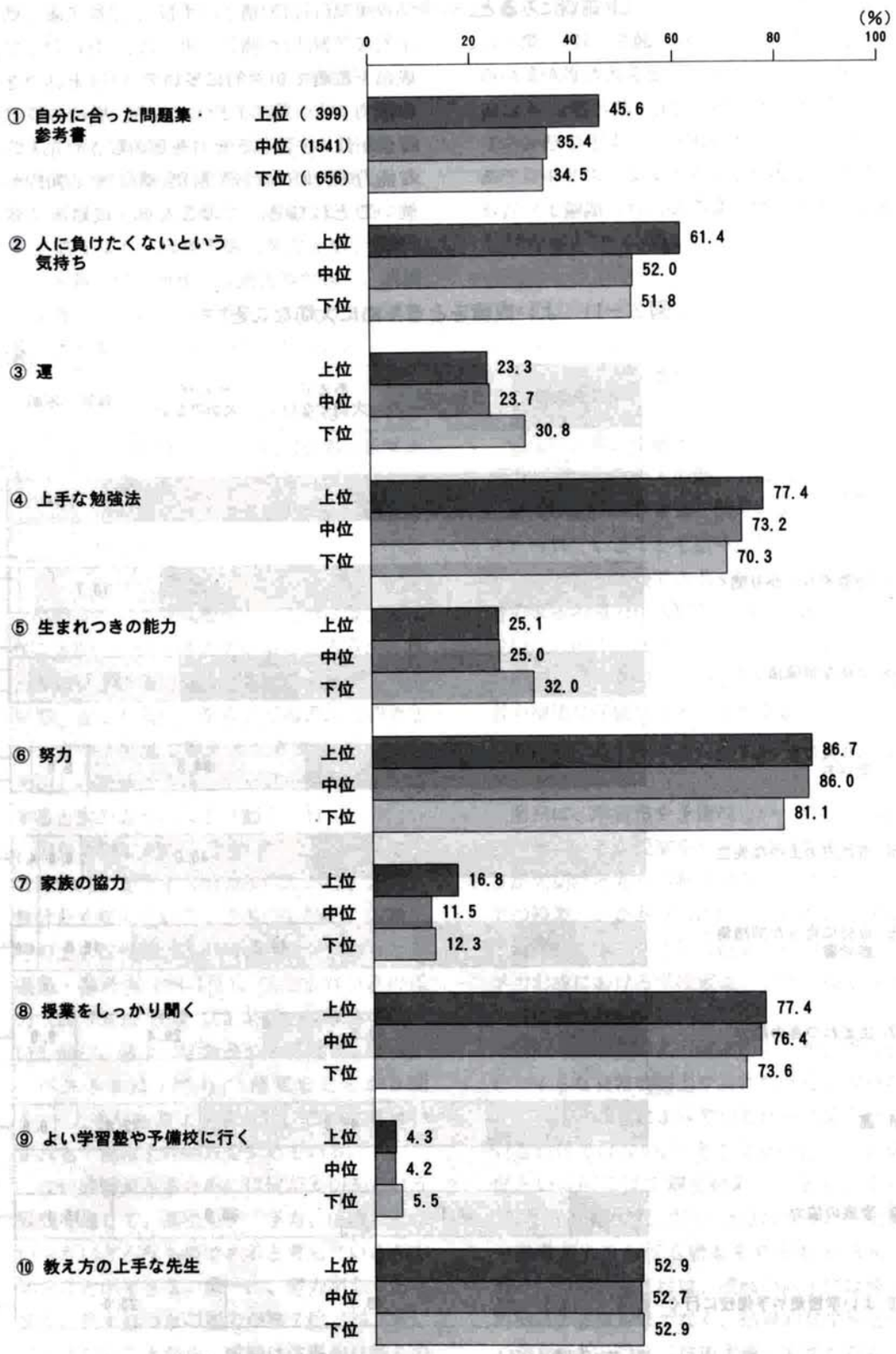
第三のグループは、回答率がおよそ３分の１の２項目である。このグループは他の項目群と比較するとたしかに回答率が小さいものの、それでも３人に１人が効用を認めている。よい親になること、あるいは楽しい生活にとって、少なからぬ生徒たちが一生懸命勉強することの効用を認めている。

図２－14　勉強の効用



注）サンプル数は2615人。

図２－12　よい成績をとるために大切なこと（成績の自己評価別）

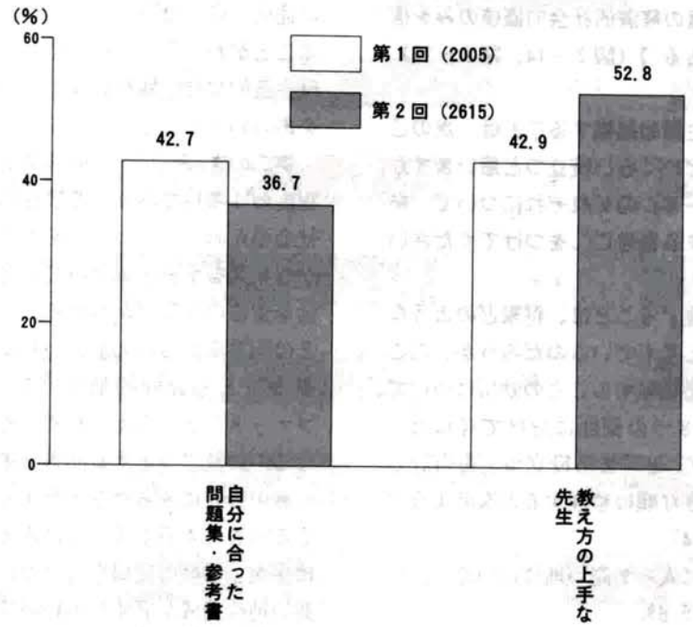


注１）数値は「とても大切」の割合。
注２）（　）内はサンプル数。

がより高い成績をとろうと考えたときに、手段を欠いていること（運や生得的能力は努力や技術の獲得では得られない）、またそもそも自分の努力によって成績の向上を図り難いという意識をもちやすいこと（その結果アスピレーションの向上は困難となる）を意味すると同時に、成績が下位にあることの原因を自分に帰属させなくてすむことをあらわしている。仮に成績が低迷したり思ったほど伸びなかった場合に、自分を責めることになるのは成績が相対的に上位にある者である。

第１回調査と比較すると（**図２－13**）、よい成績をとるために、「自分に合った問題集・参考書」が減少し（42.7%→36.7%）、「教え方の上手な先生」が大きく増加している（42.9%→52.8%）。

図２－13　よい成績をとるために大切なもの（第１回との比較）



注１）数値は「とても大切」の割合。
注２）（　）内はサンプル数。

3．勉強の効用

【一生懸命勉強することは、第一に会社や役所に入って高い地位につく（出世する）のに、第二に一流の会社に入るのに役立つと考えられている。つまり「職業的な成功、地位の達成」の手段として役立つと考えられている。成績上位者ほど、学びの本質的な効用（尊敬される人になる、社会のために役立つことをする、精神的に豊かな生活をする等）を認識し、下位者ほど学歴の経済的社会的価値のみを信仰する傾向がある。】（図２－14、図２－15）

Q12　一生懸命勉強することは、次のことにどれくらい役立つと思いますか。1）～8）のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

一生懸命勉強することは、将来どのような面で役に立つと考えているのだろうか。ここでは、一生懸命勉強することの効用について、以下のような８つの側面に分けて尋ねた。「とても役立つ」と「まあ役立つ」を合計して、数値の大きな順に整理すると次のようになる（図２－14）。

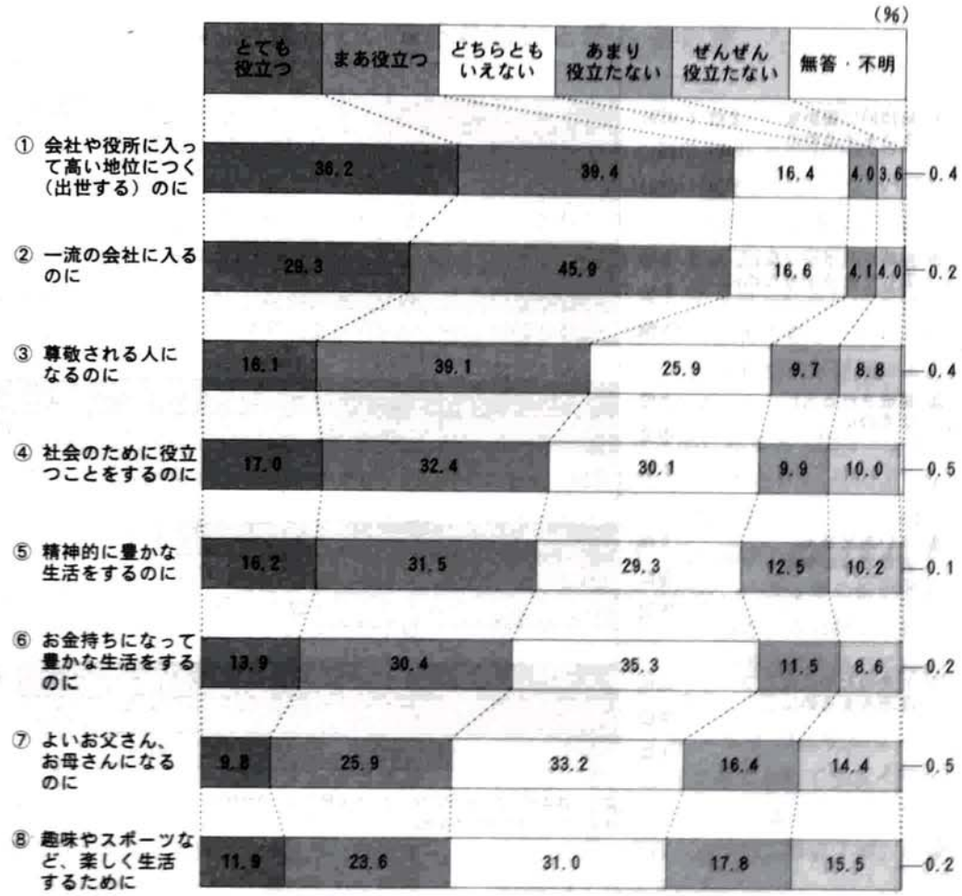
①会社や役所に入って高い地位につく（出世する）のに　75.6%
②一流の会社に入るのに　75.2%
③尊敬される人になるのに　55.2%
④社会のために役立つことをするのに　49.4%
⑤精神的に豊かな生活をするのに　47.7%
⑥お金持ちになって豊かな生活をするのに　44.3%
⑦よいお父さん、お母さんになるのに　35.7%
⑧趣味やスポーツなど、楽しく生活するために　35.5%

回答率から８項目は３つに分類できる。第一に回答率が７割を超え、多数の生徒が役立つと答えた「出世」と「一流の会社」の２項目である。ここから、一生懸命勉強することは、第一に一流の会社に入ったり、その後の出世に役立つ、つまり「職業的な成功、地位の達成」の手段として役立つと考えられていることがわかる。これは見方をかえれば、学歴主義的な社会観を高校生が抱いていることをあらわしている。

第二のグループは、回答率が45%から55%程度の４項目である。尊敬される人になる、社会のために役立つことをする、精神的に豊かな生活をする、お金持ちになって豊かな生活をするの４項目からなる。これらの項目は、その回答率から考えて、いわば一生懸命勉強することの周縁的効用（フリンジ・ベネフィット）ととらえられている。お金持ちになるのに役立つとする回答は半数にみたず、一流の会社に入ったり出世するのに役立つとする回答と矛盾するようにみえる。これは高校生が、学歴の獲得を通じた組織の中での職業的地位達成が必ずしも経済的豊かさをもたらさないことを見抜いていることのあらわれかもしれない。

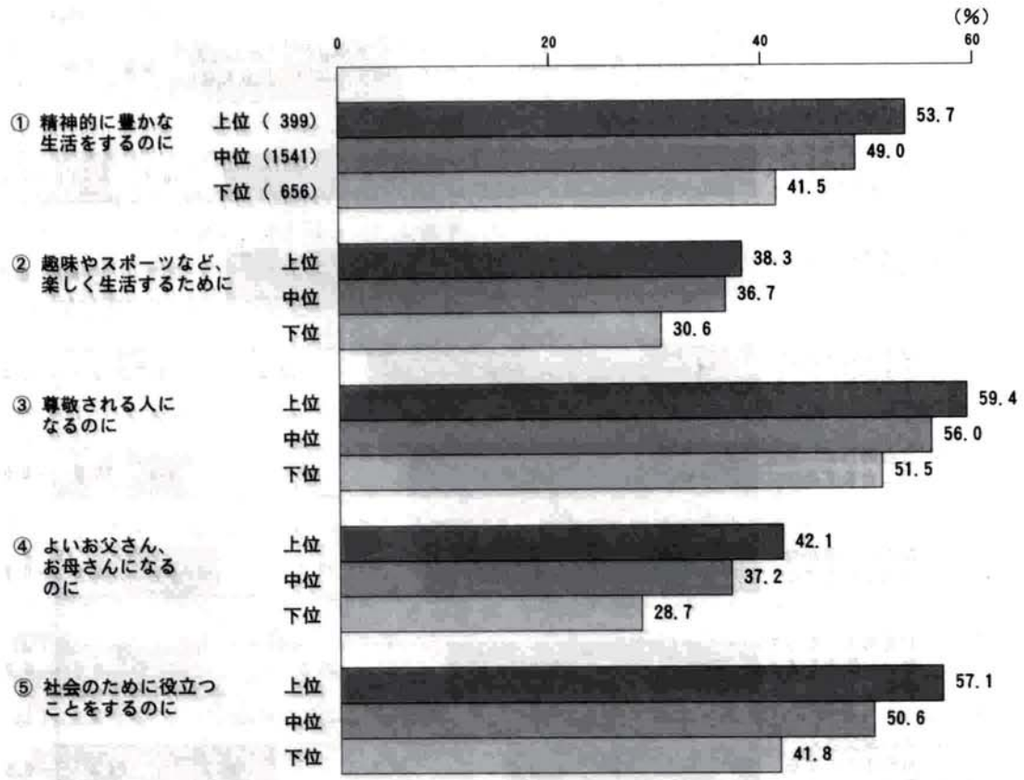
第三のグループは、回答率がおよそ３分の１の２項目である。このグループは他の項目群と比較するとたしかに回答率が小さいものの、それでも３人に１人が効用を認めている。よい親になること、あるいは楽しい生活にとって、少なからぬ生徒たちが一生懸命勉強することの効用を認めている。

図２－14　勉強の効用



注）サンプル数は2615人。

図２－15　勉強の効用（成績の自己評価別）



注１）数値は「とても役立つ」と「まあ役立つ」の合計。
注２）（　）内はサンプル数。